

論文内容の要旨

放送大学大学院文化科学研究科
文化科学専攻人間科学プログラム

2020年度入学

(学 生 番 号) 201-700070-0

ふりがな なかがわ と き こ
(氏名) 中川 登紀子

1. 論文題目

ヘアメイクアップを施した顔の対人魅力、印象に関する研究

2. 論文要旨

顔の容貌は、他者から魅力的だと思われたり、好印象を得たり、対人関係をより良く構築するために重要である。顔の容貌を変える最も身近な手段であるヘアメイクアップを利用することで、対人魅力や印象を向上できることが明らかとなっている。その一方で、ヘアメイクアップを施した顔の対人魅力判断、印象知覚についてはまだ解明されていない部分も多い。

本研究では、①ヘアメイクアップの色彩的特徴と対人魅力・印象との関係性を明らかにすること(研究1・2・3)、②対人魅力と印象との関係を明らかにすること(研究1・3・4)、③ヘアカラー・リップカラー・アイカラーの配色による効果を確認すること(研究4)の3つを主目的、④知覚者の性差・年代差の分析を行うこと(研究1-4)を副次的な目的として4つの研究を行った。4つの研究で用いる刺激は、日本人女性の平均顔に髪型を合成した画像をベースラインに毛髪部・口唇部・上眼瞼部の色を変更し作成した。

研究1は、親近性・女性性(女性らしさ)・幼児性(若々しさ)について取り上げ、ヘアメイクアップの色彩的特徴と対人魅力や親近性・女性性・幼児性との関係を明らかにすることを目的として行った。6色のヘアカラー・6色のリップカラー・8色のアイカラーの合計20の刺激を用い、刺激毎に対人魅力や印象を評価する方式で実施した。その結果、対人魅力・親近性は低明度のヘアカラーと高明度のリップカラー・アイカラー、女性性は赤のヘアカラーと高明度のリップカラー・アイカラー、幼児性は高明度のヘアカラー・リップカラー・アイカラーでそれぞれ高く評価されることが示された。また親近性と対人魅力との間には強い正の相関関係が認められ、女性性・幼児性もリップカラーとアイカラーについては対人魅力との間にそれぞれ強い正の相関関係が認められた。ただしヘアカラーについては対人魅力と女性性・幼児性との間に有意な正の相関関係は認められなかった。

研究 2 は、対人魅力や親近性・女性性・幼児性に加え、似合い・華美性(華やかさ)・活動性や「かわいい」「エレガント」といった感性的印象を取り上げ、ヘアカラー・リップカラーの色彩的特徴とこれらの印象との関係を明らかにすることを目的として行った。48 色のヘアカラー刺激と 27 色のリップカラーそれぞれについて各印象に相応しい色を選択する方式で実施した。その結果、女性性は主に赤みが(赤みが強いほど女性性が高い)、幼児性は主に明度が(明度が高いほど幼児性が高い)印象に影響することなど、色の要素(明度・色相・彩度)と外見的印象との関係性を明らかにすることができた。また「きれい」「似合わない」といったネガティブな評価項目については、非常に高い知覚者間のコンセンサスが示された。

研究 3 は、性格を取り上げ、ヘアメイクアップの色彩的特徴と性格との関係性を明らかにすること、対人魅力と知覚される性格との関係について類似説・相補説・社会的望ましき説・個人的望ましき説のいずれが妥当であるか明らかにすることを目的として行った。性格の測定にあたっては Big Five(外向性・協調性・勤勉性・情緒安定性・開放性)を用いた。8 色のヘアカラー、6 色のリップカラー、6 色のアイカラーの計 20 の刺激を用いて、刺激毎に対人魅力や性格を評価する形式で実施した。その結果、素顔・素髪に近い自然色やヘアメイクアップで多用される定番色は協調性・勤勉性・情緒安定性と対人魅力が、ヘアメイクアップで利用されることの少ない非定番色は外向性・開放性が、それぞれ高く評価されることが示された。協調性・勤勉性・情緒安定性は対人魅力と強い正の相関関係が示されるなど、社会的望ましき説・個人的望ましき説が妥当であることを示す結果であった。一方で、外向性・開放性については対人魅力と負の相関関係が示されるなど、いずれの説においても妥当であるという結果は示されなかった。

研究 4 は、研究 1 で扱った親近性・女性性・幼児性、研究 3 で扱った性格(Big Five)に加え、接近・回避判断に関わる印象(信頼性・支配性)を取り上げ、対人魅力とこれらの印象との関係について明らかにすると共に、ヘアカラー・リップカラー・アイカラーの配色による効果を確認することを目的とした。ヘア 3 色×リップ 3 色×アイ 2 色の合計 18 配色の刺激を用い、各刺激について印象を評価する形式で実施した。その結果、親近性・女性性・幼児性・協調性・勤勉性・情緒安定性・信頼性は対人魅力との間に強い正の相関関係が、外向性・開放性・支配性は対人魅力との間に強い負の相関関係が示された。また、ヘアカラー・アイカラーのうち非定番色が 1 箇所でも入ると対人魅力や親近性・協調性・勤勉性・信頼性が低下し、外向性・支配性が高くなることが示された。

研究 1—4 を通じて、主に以下の 6 つの点が明らかになった。1 つ目は、定番色や自然色を利用することで対人魅力が高く、非定番色で対人魅力が低く評価されたことである。単純接触効果に見られるような見慣れや典型性がヘアメイクアップでも重要であるために、典型的なヘアメイクアップほど対人魅力が高く評価されると考えられる。

2つ目は、対人魅力が低く評価されるヘアカラー・リップカラーは、対人魅力が高く評価されるヘアカラー・リップカラーより非常に高いコンセンサスが示されたことである。この要因として、ポジティブな情報よりネガティブな情報に重きが置かれやすいというネガティビティ・バイアスの影響が考えられる。

3つ目は、刺激を1つずつ提示した場合と多数の刺激を同時提示した場合とで対人魅力が高く評価されるヘアメイクアップが異なったことである。多数を同時提示した場合、1つずつ提示した場合と比較し、対人魅力が高く評価された色がヘアカラーは高明度方向に、リップカラーは高彩度方向に、それぞれシフトした。一度に多くの顔画像を見ることで典型的なヘアメイクアップがシフトしたことや、大人数下では華美性・外向性・開放性の高いヘアメイクアップが対人魅力も高く評価されやすいことが考えられる。

4つ目は、社会的に望ましい印象と考えられる親近性・協調性・勤勉性・情緒安定性・信頼性は対人魅力との間にそれぞれ非常に強い正の相関関係が、支配性は対人魅力との間に非常に強い負の相関関係が示されたことである。この要因としては、次の2つが考えられる。1つ目は、美人ステレオタイプがヘアメイクアップに影響し、対人魅力が高く評価されたヘアメイクアップは社会的に望ましい印象が知覚されたことである。もう1つは、接近・回避判断が影響し、接近判断がなされたヘアメイクアップで対人魅力や社会的に望ましい印象が高く評価されたことである。女性性・幼児性も対人魅力と強い正の相関関係が示されたが、社会的に望ましい印象と比較すると強い相関関係ではなかった。女性性や幼児性が美人ステレオタイプや接近・回避判断の影響を受けにくいことや単独の色の有する印象の影響を受けやすかったためと考えられる。また外向性・開放性は対人魅力と負の相関関係が示されたが、これは外向性・開放性と典型性とが競合すること、外向性や開放性が必ずしも対人魅力を上げる要素ではないことが考えられる。

5つ目は、ヘアカラー・リップカラー・アイカラーを組み合わせた時、ヘアカラーまたはアイカラーのいずれか1箇所 non-standard color を含むと、対人魅力や親近性・協調性・勤勉性・信頼性が低く評価され、外向性・支配性が高く評価されることである。non-standard color を含む部位が0箇所・1箇所の差は、1箇所・2箇所の差よりも大きかった。この理由としては、ネガティブな情報に重きが置かれるネガティビティ・バイアスの影響が考えられる。

6つ目は、男性より女性が、また20代より30代や40代が、それぞれ対人魅力や印象の評価において高低差が大きい傾向が示されたことである。性差が示された理由としては、女性は男性より顔の識別などに優れること、ヘアメイクアップの経験の差などが考えられる。年代差が示された理由としてはヘアメイクアップの経験の差や社会経験の差に基づく規範意識の違いが考えられる。

本研究では今後解決すべき課題も残された。最も大きな課題として挙げられるのが、美人ステレオタイプや接近・回避判断が対人魅力や印象に影響するので

あれば、対人魅力が高く評価されたり、接近判断がなされたりするようなヘアメイクアップの要素はそもそも何であるのかという問題である。定番色や自然色の対人魅力が高く評価されることから、ヘアメイクアップの典型性が影響を及ぼすと考えられるが、今後検証が必要である。また仮に美人ステレオタイプや接近・回避判断が対人魅力や印象に影響するのであれば、外向性・開放性が高いほど対人魅力などが高くなると考えられるが、本研究では外向性・開放性と対人魅力との間には負の相関関係が示された。外向性・開放性と対人魅力との関係についても今後精査が必要であると考ええる。

本研究では条件を統制するため平均顔を用い、また研究 1・3・4 ではカラーバリエーションを数色に絞った上で研究を行ったが、対人魅力や印象を向上させるヘアメイクアップ理論を実用化するためには、生態学的妥当性を向上させる必要があると考ええる。今後、ヘアメイクアップの網羅性を高める、平均顔以外の顔を用いる、文脈を設定するなど、生態学的妥当性を向上させた実験条件による研究を行うことで、より体系的で実用価値の高いヘアメイクアップ理論を構築できると考える。

Abstract

The School of Graduate Studies,
The Open University of Japan

Name Tokiko Nakagawa

Interpersonal Attractiveness and Facial Impressions: The Role of Hair and Makeup

Facial aesthetics is considered important to be perceived as attractive by others, making a good impression, and building better interpersonal relationships. It has been demonstrated that interpersonal attractiveness and impressions can be improved by using hair and makeup, which are the most familiar means of changing facial appearance. However, many aspects of interpersonal attractiveness, judgments, and impression perceptions of hair- and makeup-applied faces that have not yet been elucidated remain.

Four studies were conducted with the following main objectives: 1) To clarify the relationship between the color characteristics of hair and makeup, and interpersonal attractiveness and impressions (Studies 1, 2, and 3); 2) To clarify the relationship between interpersonal attractiveness and impressions (Studies 1, 3, and 4); 3) To confirm the effects of color schemes for hair color, lip color, and upper eyelid color (Study 4); and 4) To analyze gender and age differences among perceivers (Studies 1-4). The variables used in the four studies were developed by changing the color of the hair, lip, and upper eyelid components of the baseline, which was based on a composite of a hairstyle on an average Japanese female face.

Study 1 was conducted to clarify the relationship between the color characteristics of hair and makeup and interpersonal attractiveness, and the relationship between hair and makeup and approachability/femininity/youthfulness. Twenty stimuli (six hair colors, six

lip colors, and eight eyelid colors) were used, and the participants rated the interpersonal attractiveness and impressions of each stimulus/variable. The results showed that interpersonal attractiveness and approachability were evaluated more highly with darker hair color, lighter lip color and eyelid color; femininity with more reddish hair color, lighter lip color and eyelid color; and youthfulness with lighter hair color, lip color and eyelid color. A strong positive correlation was found between approachability and interpersonal attractiveness, as well as between femininity/youthfulness and interpersonal attractiveness regarding lip color and eyelid color. However, no significant positive correlation was found between interpersonal attractiveness and femininity or youthfulness regarding hair color.

In Study 2, in addition to interpersonal attractiveness, approachability, femininity, and youthfulness, impressions of suitability, gorgeousness, activity, "cute" and "elegant," were also examined to explore the relationships between the color characteristics of hair/lip and these impressions. The participants were asked to select a color appropriate for each impression from among the 48 hair color stimuli/variables and 27 lip color stimuli/variables. The results showed that the more reddish the color, the higher the evaluation of femininity; the higher the lightness, the higher the evaluation of infantility. The relationship between color elements, such as lightness, hue, and saturation, and appearance impressions was thus clarified. Additionally, a very high consensus among participants was found for negative evaluation items: "dislike" and "unsuitable."

Study 3 focused on personality, with the objective of clarifying the relationship between personality and the color characteristics of hair and makeup. The aim was to determine whether the similarity, complementarity, social desirability, or personal desirability theories were valid for the relationship between interpersonal attractiveness and perceived personality. Personality was measured using the Big Five subscales (extroversion, agreeableness, conscientiousness, emotional stability, and openness). Twenty stimuli/variables (eight hair colors, six lip colors, and six eyelid colors) were used, and the participants rated the interpersonal attractiveness and personality of each stimulus/variable. The results showed that natural hair and makeup colors, which are similar to the real facial complexion and hair color, and standard hair and makeup colors, which are frequently used, were rated highly for agreeableness, conscientiousness, emotional stability, and

interpersonal attractiveness. Alternatively, non-standard hair and makeup colors, which are rarely used in hair and makeup, were rated highly for extroversion and openness. Agreeableness, conscientiousness, and emotional stability showed strong positive correlations with interpersonal attractiveness, indicating the validity of social and personal desirability theories. Neither theory was valid for extraversion and openness; both demonstrated a negative correlation with interpersonal attractiveness.

In addition to the approachability, femininity, and youthfulness addressed in Study 1 and the personality (Big Five Personality Traits) addressed in Study 3, Study 4 addressed impressions associated with approach/avoidance judgments (trustworthiness and dominance). It did so to clarify the relationship between interpersonal attractiveness and these impressions as well as to confirm the effects of hair color, lip color, and eyelid color schemes on interpersonal attractiveness. This study aimed to clarify the relationship between interpersonal attractiveness and these impressions. In total, 18 color schemes (three hair colors, multiplied by three lip colors, multiplied two eyelid colors) were used, and the participants were asked to evaluate their impressions of each stimulus/variable. The results showed that approachability, femininity, youthfulness, agreeableness, conscientiousness, emotional stability, and trustworthiness were strongly positively correlated with interpersonal attractiveness. Whereas extraversion, openness, and dominance were strongly negatively correlated with interpersonal attractiveness. Furthermore, it was demonstrated that interpersonal attractiveness, approachability, agreeableness, conscientiousness, and trustworthiness decreased dramatically, while extraversion and dominance increased dramatically, even when one non-standard hair or eyelid color was present.

Studies 1-4 discovered the following six main points: first, interpersonal attractiveness was higher when standard or natural hair and makeup colors were used, and interpersonal attractiveness was lower when non-standard hair and makeup colors were used. Typicality or familiarity, as seen in the mere-exposure effect, is considered important in hair and makeup. Therefore, the more typical the hair and makeup, the higher the interpersonal attractiveness was evaluated.

Second, hair color and lip color that rated low in interpersonal

attractiveness showed a much higher consensus than hair color and lip color that rated high in interpersonal attractiveness. This may be due to a negativity bias, whereby negative information is given more weight than positive information.

Third, the hair and makeup that were rated highly for interpersonal attractiveness differed between cases in which one stimulus/variable was presented at a time and those in which many stimuli/variables were presented simultaneously. In the latter, the color that was rated highly for interpersonal attractiveness shifted toward higher lightness for hair color and higher saturation for lip color compared to when stimuli/variables were presented one at a time. It is possible that the typical hair and makeup styles shifted when the subjects viewed numerous facial images simultaneously, and that hair and makeup with high gorgeousness, extroversion, and openness were more likely to be rated high in terms of interpersonal attractiveness in large groups of people.

Fourth, approachability, agreeableness, conscientiousness, emotional stability, and trustworthiness, which are considered socially desirable impressions, showed strong positive correlations with interpersonal attractiveness, while dominance showed a strong negative correlation with interpersonal attractiveness. There are two possible reasons for this. First, physical attractiveness stereotypes affect hair and makeup, and hair and makeup with high interpersonal attractiveness are perceived as socially desirable. The second possible reason is the influence of approach/avoidance judgments; hair and makeup judged to be more approachable rated higher in terms of interpersonal attractiveness and socially desirable impressions. Femininity and youthfulness also showed a strong positive correlation with interpersonal attractiveness, but the correlation was not as strong compared to socially desirable impressions. This may be because femininity and youthfulness were less influenced by physical attractiveness stereotypes and approach/avoidance judgments, and more influenced by single-color impressions. Moreover, extraversion and openness were negatively correlated with interpersonal attractiveness. This may be because extraversion and openness compete with typicality and because extraversion and openness do not necessarily increase interpersonal attractiveness.

Fifth, when hair color, lip color, and eyelid color were combined,

interpersonal attractiveness, approachability, agreeableness, conscientiousness, and trustworthiness were rated low, and extraversion and dominance were rated high, when either hair color or eyelid color contained a non-standard hair and makeup color. The difference of impression between the stimuli containing one non-standard color or none, was larger than the difference between those containing one non-standard color or two. One possible reason for this is the influence of negativity bias, in which more weight is placed on negative information.

Finally, women in their thirties and forties tended to have wider ranges of high and low ratings of interpersonal attractiveness and impressions, respectively, compared to men in their twenties. The reasons for the gender differences may include the fact that women are better at facial recognition than men, as well as because there exist differences in experience with hair and makeup applications. The reason for the age difference may be due to normative consciousness based on differences in experience in hair and makeup applications and social experience.

This study has some limitations that need to be addressed in the future. The most significant limitation is that if physical attractiveness stereotypes and approach/avoidance judgments affect interpersonal attractiveness and impressions, what elements of hair and makeup should be highly evaluated for interpersonal attractiveness and approach judgments? Because the interpersonal attractiveness of standard and natural colors is highly evaluated, it is thought that the typicality of hair and makeup may have an influence; however, further validation is required. If physical attractiveness stereotypes and approach/avoidance judgments affect interpersonal attractiveness and impressions, then higher extroversion and openness would be associated with higher interpersonal attractiveness. However, the present study showed a negative correlation between extraversion/openness and interpersonal attractiveness. The relationship between extraversion/openness and interpersonal attractiveness thus requires further investigation.

In this study, average faces were used to control conditions; in Studies 1, 3, and 4, color variations were limited to a few colors. However, there is a need to improve the ecological validity of hair and makeup theory for practical use in the improvement of interpersonal attractiveness and impressions. It is

believed that a more systematic hair/makeup theory with high practical value can be developed by conducting research under experimental conditions with improved ecological validity, for example, through increasing the comprehensiveness of hair/makeup, using faces other than the average face, and setting the context.

博士論文審査及び試験の結果の要旨

学位申請者

放送大学大学院文化科学研究科
文化科学専攻人間科学プログラム
氏名 中川 登紀子

論文題目

ヘアメイクアップを施した顔の対人魅力、印象に関する研究

審査委員氏名

- | | |
|------------------------------------|-------|
| ・主査（放送大学教授 博士（人文科学）） | 森 津太子 |
| ・副査（放送大学教授 教育学修士） | 高橋 秀明 |
| ・副査（放送大学教授 Ph. D. (Communication)） | 大橋 理枝 |
| ・副査（北星学園大学学長 文学修士） | 大坊 郁夫 |

論文審査及び試験の結果

1. 本論文の概要

本論文は、ヘアメイクアップを施した顔の対人魅力と印象を、4つの実験研究を通じて探究したものである。日本人女性の平均顔にさまざまなヘアメイクアップを施した顔写真を実験刺激とし、1. ヘアメイクアップの色彩的特徴と対人魅力・印象との関係性を明らかにすること、2. 対人魅力と印象との関係を明らかにすること、3. ヘアカラー・リップカラー・アイカラーの配色による効果を確認すること、4. 知覚者の性差・年代差の分析を行うことを目的に研究が進められた。論文の構成は次のとおりである。

まず第1章では、本研究の背景と目的が述べられた。ヘアメイクアップを利用する動機には、他者を意識したものが多いこと、また顔の容貌は対人関係を中心とする様々な場面で重要な影響を及ぼすこと、それゆえにヘアメイクアップは重要な機能を持つことなどが、先行研究の知見とともに論じられ、目的の詳細と実験手続きの概要が説明された。

第2章から第5章は、それぞれ研究1から研究4に対応している。第2章で報告された研究1では、特に外見的印象である親近性、女性性、幼児性に焦点を当て、ヘアカラー6色、リップカラー6色、アイカラー8色のバリエーションを持つ計20種類の顔写真が、どのように評価されるかが検証された。さらに第3章で報告された研究2では、外見的印象として、似合い、華美性、活動性といった感性的印象を加えた上で、それぞれの印象に相応しい顔写真を、48色のヘアカラー、27色のリップカラーという幅広いバリエーションのなかから選択するという研究が行われた。

つづく第4、5章で報告された研究3、4は、クラウドソーシングサービスを用いて研究対象者が集められた。研究1、2では、美容系大学院の大学院生など、美容に何らかの関わりがある対象者が、ヘアメイクアップが施された顔写真を評価したが、研究3、4は、一般の幅広い年代の男女を対象者としたことで、より一般性のある知見を得ることが試みられた。また内面的印象として、性格（Big Five）や、近年の顔の印象評定でよく用いられる信頼性、支配性という評価次元（研究4のみ）が導入された点も研究1、2とは異なる点である。これらの評価次元において、研究3ではヘアカラー8色、リップカラー6色、アイカラー6色のバリエーションを持つ計20種類の顔写真が評価され、また研究4では配色の効果を見るために、ヘアカラー3色、リップカラー3色、アイカラー2色を掛け合わせた計18種類の顔写真が評価された。

第6章では総合考察として、4つの研究を通じて得られた知見が目的に沿って考察された。1. ヘアメイクアップの色彩的特徴と対人魅力・印象との関係性を明らかにすることについては、全般的に自然色、定番色が対人魅力、印象を高める傾向にあること、2. 対人魅力と印象との関係を明らかにすることについては、外見的であるか、内面的であるかにかかわらず、ほとんどの印象は、対人魅力と強い正の相関関係にあるが、外向性、開放性など、負の関係性が見られる印象があることなどが述べられた。また3. ヘアカラー・リップカラー・アイカラーの配色による効果については、ヘアやアイに非定番色が含まれると、対人魅力も印象も全般的に低くなること、4. 知覚者の性差・年代差の分析では、女性や若者（20代）で評価のばらつきが大きいことなどが述べられ、単純接触効果やネガティビティ・バイアスなど、心理学の概念を用いた考察が展開された。最後に、実生活での応用の可能性など今後の展望が述べられた。

2. 本論文の評価

本論文の成果には、第一に、ヘアメイクアップを施した顔を評価する標準的な実証研究の手法を確立したことが挙げられる。顔の容貌がその人物の対人魅力や印象を左右することは古くから知られており、社会心理学を中心に数多くの学術研究が行われてきた。しかしながらヘアメイクアップは、顔の容貌を容易に変えられる身近な手段でありながら学術研究は散発的で、必然的に美容業界においては科学知よりも経験知が優先される傾向があった。そのような現状のなか中川氏は、実証研究を蓄積することの重要性を認識し、ヘアメイクアッ

ブを施した顔を評価する標準的な手法を模索した。本論文で報告した研究は、いずれも実験刺激に平均顔を使用するなどの条件統制を行い、純粋にヘアメイクアップの効果を評価しようとするものであり、また4つの研究を通じて、実験刺激以外の手続きについても改良を重ねていった。一連の研究を通じて確立した手法は、今後のヘアメイクアップに関する学術研究に大いに寄与するものと考えられる。

第二の成果として、ヘアメイクアップが対人魅力や印象に与える影響について、膨大なデータを提供したことが挙げられる。本論文で報告された一連の研究は、同じ平均顔に、さまざまなバリエーションのヘアメイクアップを施した写真を見せて評価を求めるものであり、いずれの研究も200名前後という数多くの対象者が評価を行っている。既述のように、ヘアメイクアップに関する学術研究は散発的であり、またその多くは欧米で行われたものである。本論文で報告されたのは、日本人の顔を実験刺激として用いた、日本人による評価の研究である。加えて、評価の次元も多様で網羅的であることから、これまで経験知が優先されがちだった美容業界に対して、情動的価値の高いデータを大量に提供したといえる。また、ヘアカラー、アイカラー、リップカラーをそれぞれ独立に扱った研究が多いなか、それらの組み合わせの効果を検討した研究を行ったことも評価できるだろう。

以上のほかにも本論文の成果は少なくないが、残された課題がないわけではない。その多くは、ここまでに挙げた成果と表裏一体を成すものである。論文審査において指摘された課題のうち、主なものを3点挙げる。

第一に、確立した研究手法がないなかで、試行錯誤的に研究が行われた代償として、顔写真の提示方法や評価の仕方、評価次元、評価者（研究対象者）の属性などが、4つの研究で一貫していないことが挙げられる。そのため、個別の研究で得られた結果がどの程度一般化可能性があるものか、また研究間で結果に相違が見られたものについては、それが何に起因するものかが明確でない。研究を進めるなかで生じる種々の制約によって、研究の手続きなどにばらつきが生じるのは致し方ない面もあるが、それが結果にどのような影響を与えた可能性があるかについて、論文のなかで十分に説明をすべきであった。

第二に、統計的分析の手法に改善の余地があるのではないかという指摘があった。現在は、ほとんどの分析を実験刺激（顔写真）ごと、あるいは評価次元ごとに行っている。このような細分化した分析は、既述のような一定の情動的価値をもたらす一方、同じ統計的分析を繰り返すことによって、第一種の過誤が生じる可能性を高めたり、結果の全体像が見えづらくなったりするという問題点がある。実際のところ、本研究で明らかになったのは、対人魅力や印象の評価が高いヘアメイクアップには自然色、定番色などの共通性があることであり、また評価次元についても、互いに連動して変わるものがほとんどで、特定のヘアメイクアップが特定の評価次元と特異に関係しているという結果は見られなかった。このような、全体を俯瞰したときに立ち現れる結果の特徴を、分析の工夫によって把握できると良かっただろう。本研究は、ヘアメイクアップ

を施した顔の対人魅力と印象について、実証研究の手法も含めて探索的に検討したものであったが、このような研究に相応しい統計的分析の手法についても検討することが望まれる。

最後に、本研究では条件統制を優先したために、ヘアメイクアップを施した顔を評価する際に影響するであろう重要な要因を捨象した点が課題として挙げられる。たとえば、同じヘアメイクアップを施した顔であっても、その人物が評価者の友人であるか、あるいは職場の同僚や上司・部下であるかなどによって評価は変わってくる。また同じ友人であっても、結婚式などの文脈では求められるヘアメイクアップは異なり、さらにはどのような職業の人物として見るかによっても評価は左右されるだろう。実生活での応用の可能性を見据えて研究を進めるのであれば、今後は、人間関係や文脈、場面等を考慮に入れた実験を計画する必要があるだろう。

以上、3つの課題を挙げたが、これらは本論文の学位論文としての水準を損なうものではなく、今後の研究の発展を期待するものである。またいずれの課題についても、本人は十分に自覚しており、近い将来の研究において克服されるものと考えられる。

3. 最終試験の結果の要旨

2023年1月20日、中川登紀子氏の論文について最終試験を行った。本試験において、審査委員が、提出論文「ヘアメイクアップを施した顔の対人魅力、印象に関する研究」に関して、既述のような課題、疑問点を挙げ、逐一説明を求めたのに対し、中川氏は適切かつ十分な回答をした。よって審査委員一同は、氏が博士の学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有するものと認定した。